

解題

——歴史地理学研究における空間認知——

竹内啓一

歴史地理学なるものをどのように理解するかということになれば、歴史地理学会の会員の間にも多様な見解が存在するであろう。過去の景観あるいは空間組織を復元するのであれ、ある社会にとっての自然条件の歴史的变化を検討するのであれ、あるいは、人間活動の地理的側面の歴史を理解するのであれ⁽¹⁾、日本の歴史地理学は豊かな研究成果をつみあげてきた。そのような研究の蓄積の上に立って、一九八四年度大会課題として「空間認知 (spatial perception) の歴史地理」が設定されたわけであるが、これは、いくつかの再検討されるべき新しい問題が、現在、学界で提起されていることに対応するものと考えられよう。

極めて素朴な、しかし根本的な、そして相關連する二つの疑問ないし反省が、まず提示されるであろう。すなわち、第一には、現在の研究者が復元した景観や空間組織、あるいは自然環境を、過去に生きた人たちは、どのように認知していたのであろうか、またそれらに、どのような意味を与えていたのであろうか、それらは、現在の研究者が認知し、意味を与えるのとはちがっていたのではなからうかということである。第二には、歴史地理学の研究において、史資料となるもの、すなわち、過去においてなされた地理的表現——文書、地図、絵図、さらには都市プランの

ような空間計画など——は、いずれも、過去の、当該の社会における価値体系あるいはコスモロジーの反映という側面をもつ、すくなくとも、それらのフィルターを通したものではないだろうかということである。

このような疑問、そして同時に、歴史地理学研究における新しい地平の提示は、一九七〇年代になって、まずはじめにアングロ・サクソン諸国の地理学界において、いわゆる人文主義的な反省がなされるなかで(2)さかんなされたようになっていった。同時に他方では、空間や環境の認知が社会的意味をもち得るのは、どのような構造を通してであるのか、また、価値体系やイメージが、人間の行動を規定するというだけでは、一種の論理ぬきの決定論でないか、という批判や疑問が提起され、個人の主観性と文化、社会構造と空間構造、さらには空間過程と空間形態の弁証法についての理論的アプローチがいくつか試みられてきたのである(3)。

ここにおいて、空間認知の歴史地理学的意味が、歴史地理学に関してなされる基本的に異なる二つの理解にしたがつて、異なったものになることには、注目しておかなければならない。それを、空間形態あるいは空間組織の発展として説明する立場からすれば、景観を変化させる主体としての人間の実践、その思想、換言すれば社会の形態よりもむしろ内部過程に目をむけるさいの一要素として、空間認知が問題になる(4)。歴史地理学を過去の地理、すなわち過去の景観や空間組織の復元にもとづく分析であると理解し、そこにおいて、人間中心主義を貫徹すれば、日本で千田が提言した「景観というサインに固有のメッセージを理解する」という景観の記号論(5)あるいは、コスグロヴのいう「過去の景観のシンボリズムの説明」という観点(6)に到達することになるのであろう。「シンボルの景観の歴史地理学」とサブタイトルがつけられたヴェネチアに関するコスグロヴの論文においては、まず、一五世紀から一六世紀にかけて、ヴェネチア人自身が、人文主義・商業主義(実利主義)・海上帝国としての誇りといったのが、

いかにして、いわば三極的なシンボリズムの空間を建設していったかということと、ヴィクトリア期社会のロマンティズムの中で、ラスキンによって、ヴェネチア像がいかに理念化されたかということとの関係が分析される。そして、それに重なるものとして、ラスキンの性的体験と、「海との結婚」の祭りに代表されるヴェネチアの女性としての形態的シンボリズムとの関係が指摘されているのである。ここでは、地理的ランガージュ、そのひとつとしての景観という表現手段にとつての空間認知の意味と、景観の記号論にとつての空間認知の意味とが、「歴史地理学」の課題として示されていることになる。

日本の歴史地理学界で、このような空間認知の意味を、最初に、具体的事例にそくして理論的に示したのは千田であった(7)。彼にあっては、主要な関心は空間の記号的構造の探求にあるが、景観をテキストとして、その意味を解説しようとするとき、空間認知が問題になることを理論的に示した功績は大きい。水津が、日本の景観のコードを体系化した場合にも、同時に日本文化における空間認知のコードが、インプリシトな形においてであれ、念頭におかれていたはずである(8)。

本紀要に掲載された論文一一篇は、佐々木卓也のものをのぞいて、いずれも一九八四年大会において、共同課題「空間認知の歴史地理」のもとに発表されたものである。佐々木論文も、その内容は共同課題にこたえたものであるが、都合で自由論題の会場で発表されたという事情から、本紀要に掲載することになった。大会の共同課題会場で発表された報告は、筆者による解題のための報告を別にしても一三であり、佐々木のをふくめれば一四にものぼる報告が、歴史地理学において、ようやく最近になってとりあげられるようになったこのような新しいテーマに対して寄せられたということは、日本の歴史地理学の各分野における研究成果の蓄積が豊かであることと同時に、国際的な

研究の視座および内容の革新に対応して、日本の多くの歴史地理学者が、各国の研究者と新しい問題意識を共有していることを示すものであるといえよう。いろいろな理由から、大会で共通課題のもとに報告された何人かの方達の寄稿をここに掲載することができなかったが、それらの方達の報告をも念頭に入れて、大会の共通課題に対する報告および討論において提起された問題のいくつかについて考えてみよう。

空間認知を、歴史地理学においてどのようにして問題にするかというさきに指摘した視座の相違は、今回のいくつかの発表の間にもはっきりと認められた。過去に生きた人たちの、あるいは過去の社会における空間認知を、史資料によって、いわば「復元」しようとする研究が、数からいえば大多数を占めていた。この場合、過去における「生きた空間」を知るための史資料の性格を検討するということがひとつの重要なテーマとなる。説話や忌詞の社会的背景は、部分的にはあるが、小野寺淳、小口千明、黒田晃弘によって検討された。これは、個々人の空間認知を、どのような論理によって、特定の社会集団のものと同定するかという問題、間主観性とか価値体系とかいう概念がこの問題の検討にさいしてもつ有効性という問題とともに、今後の重要な研究課題になるであろう。そのような史資料の表現手段、すなわちランガージュとしての絵図や都市プランの吟味は、「生きた空間」の「復元」を課題にした五十嵐勉、岩鼻通明、久武哲也をはじめとする多くの報告者によってなされた。

以上のような検討の手続きを経た後に、過去に生きた社会集団の空間認知が、当然のことながら過去のコンテクストのなかで検討の対象になるとき、次に問題になるのは、そのような構造化された空間において、景観を構成する要素がどのようなパラダイム——記号論における用語としてのパラダイム——を構成しているかということである。このようなパラダイムあるいは構造化されたパラダイム群——あるいはシンタグム——に対して、部分的名称として、

コスモロジーとか価値体系などという用語が用いられることが多いが、そのさい、過去の「生きられた空間」復元のための史資料のイデオロギー的性格——それは、本来的に社会的なものである——としての価値体系やコスモロジーとは、研究の手続きの上では、異なった次元のものとして取り扱わなければならないであろう。

このような観点から、復元された過去の景観を「生きられた空間」として把握し、その構造を解明しようとした報告は、古田悦造、黒田晃弘、小野寺淳、久武哲也、岩鼻通明、青山宏夫、石崎直義のものなど数多く見られる。「生きられた空間」の構造を解明するためのコードということになれば、当然のことながら各研究者ごとに多様であるが、討論を深化させるためには学会内部での理論的検討を進めることが今後の課題となるであろう。

このような構造そのものの解明よりも、むしろ、復元された景観を通しての空間認知の場所的相違、いわば「生きられた空間」のシンクロニックな対比も歴史地理学の課題たりうるし、金井年の報告はこの問題にとりくんだものといふことができる。

歴史地理学を、空間形態あるいは空間組織の変化の歴史学的研究と理解する——そして国際的にみれば支配的な——立場からすれば、「空間認知の歴史地理」という課題のもとで問題になるのは、第一には、「形態」または「組織」の変化、すなわち、「過程」に及ぼす社会化された空間認知の役割であり、第二には、「生きられた空間」のダイアクロニックな分析である。第一の問題に焦点を当てた報告としては脇田武光、安田喜憲などの研究をあげることができよう。このジャンルの研究においては、「生きられた空間」の構造の論理が明確にされたとき、換言すれば、コスモロジーとか自然観とかいうものが、安易な文明論の恣意性から自由になったとき、はじめて説得力をもちうるのであろう。この点で、千田稔は、そのような論理を把握するコードを提起したうえで、「風景論」という「生きられ

た空間」の表現のダイアクロニックな研究を指向していたし、五十嵐勉は、水害に関する空間認知のダイアクロニックな分析に正面からとりこんだ。

このように概観してみると、今回の大会における諸報告は、歴史地理学における空間認知の諸問題を、かなり広範に網羅していたということができるし、その大部分が、論文として本紀要に掲載されているわけである。しかし、今後日本の歴史地理学界でさらに研究されなければならない多くの分野が、いわば *Terrae Incognitae* として残されていることも論をまたない。史資料についていえば、絵図をとりあげた研究は多いが、その他の地図(9)さらに絵画作品(10)、さらには文学作品(11)を素材としてとりあげた研究は決して多くない。絵画や文学についていえば、作者の個人的環境認知と審美観が重要な要素をなしているため、それに社会的意味を与える理論的作業にも困難があるし、これらを素材としての科学的推論を実証する手続きには、さらに一層の困難がともなうであろう。また、構造化された空間の形態と、それらが形成される過程との間の弁証法に対する理論的および実証的アプローチ(12)も、今後さらに深化されるべき研究分野となるであろう。

本稿のはじめに、「空間認知の歴史地理」が新しい課題であると指摘し、同時に、日本における歴史地理学研究の成果の豊かな蓄積が、この新しい課題に対する積極的かつ創造的なとりくみを可能にしたのであると述べたが、これは、別の見方をすれば、空間認知などという概念が問題にされるようになったのが新しいということなのであって、従来の歴史地理学研究において、史資料が批判的に吟味され、復元された景観が検討される場合においても、空間形態や空間組織の歴史的变化が検討される場合にも、インプリシトな形においてであれ、空間認知の問題は、常に研究者の念頭にあったということを意味しよう。この意味で、空間認知の歴史地理とは、歴史地理学の研究において、古

く、かつ新しい課題なのである。換言すれば、新奇をてらうことなく、過去の研究の蓄積の上に発展させられ、そこにおいて、新しい理論的構築が達成されなければならない研究分野なのであり、このことを、本紀要に掲載された論文は、それぞれがそれなりの方法で示しているといえることができる。

注

- (1) 歴史地理学をどのようなものとして理解するかという議論に関しては、比較的によくまとめられ、かつその主張に説得力があるものとして、ここでは、Guelke, L.: "Historical Understanding in Geography. An Idealist Approach" Cambridge Univ. Press 1982. とくに、その第一章および第三章を参考文献としてあげておく。
- (2) 最も先駆的なものとしては、Wright, J.K.: *Terrae Incognitae: The Place of the Imagination in Geography* "Annals, Assoc. American Geographers" vol. 37, 1947. があり、さらに、geosophy という言葉が用いられた。いわゆる人文主義的反省の先駆をなすものとしては、Tuan, Yi-fu: *Discrepancies between Environmental Attitudes and Behavior; Examples from Europe and China* "Canadian Geographers" vol. 12, 1968, Lowenthal, D.: *The American Scene* "Geographical Review" 1968 などがあるが、これらの論文においては、人びとが、彼らの理念またはイメージにしたがって景観をかたちづくるのか、それとも人びとの価値体系が、彼らの生活様式および環境の影響を受けるのかという点での二元論的混乱があった。このことは、最近 Chambers, R.W: *Images, Acts and Consequences: A Critical Review of Historical Geography*, Baker A.R.H. and M. Billinge(eds.): "Period and Place. Research Methods in Historical Geography" においても指摘されている。ここに述べたような意味での歴史地理学の新しい地平の指摘は、Guelke, L.: *On Rethinking Historical Geography* "Area" vol. 7, 1975; Billinge, M.: *In Search of Negativism: Phenomenology and Historical Geography* "Journal of Historical Geography" vol. 3, 1977. においてなされた。
- (3) Gregory, D: *The Discourse of the Past: Phenomenology, Structuralism and Historical Geography* "Journal of Historical Geography" vol. 4, 1978. Cosgrove, D.: *Place, Landscape and the Dialectics of Cultural Geography*

“*Canadian Geographers*”. Baker, A.R.H.: *Historical Geography: Understanding and Experiencing the Past* “*Progress in Human Geography*” vol. 2, 1978.

- (4) この立場を鮮明に示しているものとして、ここに引用した Baker, A.R.H. and Billinge, M. (eds.): “Period and Space” に収録されている次の二つの文献をあげることもできる。Baker, A.R.H.: *On Ideology and Historical Geography*. Norton, W.: *Historical Geography as the Evolution of Spatial Form*.
- (5) 千田 稔「地理的『場』の始原性を求めて——記号論的アプローチ——」人文地理三三巻、一九八〇。Senda, M.: *Perceived Space in Ancient Japan*. Baker, A.R.H. and M. Billinge(eds.) *op. cit.* に所収。
- (6) Cosgrove, D.: *The Myth and Stones of Venice* “*Journal of Historical Geography*” vol. 8, 1982.
- (7) 前掲(5)の二論文、および Senda, M.: *Territorial Possession in Ancient Japan: The Real and the Perceived*. Assoc. of Japanese Geographers(ed.), “*Geography of Japan*” Teikoku-shoin. 1980.
- (8) Suizu, I.: *The Codes of Japanese Landscape: An Attempt at Topological Geography*. Takeuchi, K.(ed.): “*Languages, Paradigms and Schools in Geography*” Hitotsubashi University. 1984. この論文のオリジナル・テキストは、同じタイトルで、“*Geographical Review of Japan*” Series B. No. 1, 1984 に掲載されたが、ここでは文章表現上に若干の相異がある筆者稿のテキストの方を参考文献としてあげておきたい。
- (9) 史資料として地図をとりあつた場合、それがどのような社会集団(社会階層別、職業別などによる区分)の地理的知識、さらには空間認知を反映しているかという困難な問題、すなわち空間認知の社会的背景の同定という問題が、まず検討されなければならない。民衆の地理意識との関連についての言及はないが、Broc, N.: *Quelle est la plus ancienne carte «moderne» de la France?* “*Annales de Géographie*” No 513 XCII^e année 1983 は、十六世紀の知識人および統治者にとつてのフランスのイメージをも考察したすぐれた研究であり、地図を素材にした空間認知に関する歴史地理学的研究の例としてあげることができる。
- (10) Relph, E.: “*Rational Landscapes and Humanistic Geography*” Croom Helm, 1981 においては、多くの絵画作品が素材として有効に利用されており、とくに、2. *The Interrelated Histories of the Ideas of Landscape and Humanism*

において、絵画作品と文学作品を素材にして、過去のイギリスの風景に対する趣向 (landscape taste) を、当然のことながら空間認知との関係で検討している。地理学者だけによるものではないが、イタリアの風土についての、イタリア人および外国人のイメージを絵画作品を通して検討し、そこに、いくつかのステレオタイプが形成されてくる過程を、イデオロギー的および社会的背景との関連で分析したものと見て、Einaudi 社による“Storia d'Italia”におさめられたいくつかの研究がある。とくに第六巻“Atlante”, 1976 は、地理学者の Gambi, L. と Quaini, M. が中心になつて、La percezione visiva dell'Italia e degli italiani nella storia della pittura (Zeri, F. 執筆), La città da immagine simbolica a proiezione urbanistica (Gambi, L. など執筆), La campagna: gli uomini, la terra e le sue rappresentazioni visive (Gambi, L. など執筆) などの長い章からなる画期的な内容からなつてゐる。第五巻“Annali”, 1982 にも、Le Goff, J.: L'immaginario urbano nell'Italia medievale (secoli V-XV), Romano, G.: Idea del paesaggio italiano, Grams, E. e J.: Mito e realtà di Roma nella cultura europea. Viaggio e idea, immagine e immaginazione. Fusco, M.A.: Il «luogo comune» paesaggistico nelle immagini di massa などの章があり、絵画・写真・都市プランなどを用いて「歴史的景観の記号論」さらには「生きられた空間」の復元が見事になされている。なお、大会でおこなった冒頭報告で、筆者は絵画作品および都市プランのスライドを用いたが、スライドによる説明部分は、ここに引用した諸文献に大きく負うものであったことを、ここに明記しておく。

- (11) Tuan Yi-fu 著、Ley, D. and M. Samuels(eds.), “Humanistic Geography, Prospects and Problems” Croom Helm, 1978 と書かれた Literature and Geography: Implications for Geographical Research と題する章において、歴史地理学の研究においては、文学作品を、地理的事実の記述としてではなく、登場人物と状況 (setting) とが作者による現実の認知 (perception of reality) —— 主観と客観の総合 —— を通して記述されたものとして取り扱わなければならないと述べている。彼によれば、文学作品は、特定の文化・時代のもとにおける体験された世界を知るためにのみでなく、環境の認知、文化価値、そして思想の歴史を知るためにも、地理学者に役に立つものである。彼の “Landscapes of Fear” Basil Blackwell, 1979 には、このような立場から、文学作品が多く用いられている。他方、Pocock, D.C.D. (ed.) の “Humanistic Geography and Literature, Essays on the Experience of Place”, Croom Helm, 1981 は、ある時代、ある文化

のもとにおける景観または場所の意味を解明するために文学作品を利用するというよりも、個々の文学作品の中における空間組織、あるいは場所や景観の意味を明らかにすることを第一の目的にした研究が、全部ではないが大部分を占めている。

- (12) 空間過程と空間形態との弁証法——論者によれば構造的関連ともとらえられる——については、地理学の分野でも多くの文献があるが、その解明を、具体的事例に即しておこなったすぐれた研究例として、ここでは Harvey, D.: *Monument and Myth*, "Annals, Assoc. of American Geographers", vol. 69, 1979 (千田稔訳編『地図のかなたに——景観の思想地——』地人書房、一九八一)に「モニュメントと神話」として所収されている(をあげておく。実証主義地理学の立場から、空間過程と空間形態との関係の分析をはじめた Harvey が、どのようにして、このようなすぐれた歴史地理学的研究をするに到ったかということについては、拙稿「デヴィッド・ハーヴェイの地理学」『一橋論叢』第九二巻、一九八四、において考察しておいた。